

Title	ロック経験哲学の構造(三)
Author(s)	平井, 俊彦
Citation	経済論叢 (1963), 92(6): 401-413
Issue Date	1963-12
URL	http://dx.doi.org/10.14989/132976
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第九十二卷 第六號

經營教育に関する若干の問題……………田 杉 競 1

ライン・ヴェストファーレン製鉄業に

おける『混合企業』の創出 (一)……………大 野 英 二 21

ロック経験哲学の構造 (三)……………平 井 俊 彦 41

明治三十二年所得税法と

減価償却会計(その三)……………高 寺 貞 男 54

昭和三十八年十二月

京都大學經濟學會

ロツク経験哲学の構造(三)

平井俊彦

五 反省——心の能動的力

感覚的经验においては、具体的に身体をもつ個人が自己の感官を媒介にして物体とかかわり、この物体からその作用を受けとって観念を構成する。このばあい人間も感覚的存在とみられ、経験はいわば人間的な自然と物体との交渉する一つの自然的世界の出来事である。ことに、社会思想的に興味ぶかいことは、この過程で人間の感覚に快樂 pleasure と苦痛 pain があらわれ、これが物への欲求さらには行為を導くものと考えられていることである。さらに、経済思想にとつて問題となるのは、自己の幸福を獲得するために物質的富を欲求し、そのために行動する人間像が市民権をもつことであろう¹⁾。すでにのべたように、ホッブズは動物のなかに生命的運動と動物的运动をみとめ、生命体としての感覚が一つの運動として欲求し意欲するものであることを、主張していた。物体に接して人間は、単に感覚的にその物体の作用を受容するのみならず、これを介して物体に対する欲求をもち、物体に働きかけることをみとめるとすれば、イギリス経験論は単に物体から人間が限定されるとする静観的態度におわるものではなく、それは対象に対する主体の行為の在り方を追求するものである。しかも、物体から限定される人間がひるがえつてこの物体を欲し、これを拒むのは、まさしく人間の本性であり自然である。もちろん、物体と人間との関

係とはいつても、ヘーゲルの弁証法にみられるように、それらの間に相互関係があつて、その間の矛盾によつて両者の形態が變化し發展するというわけではない。しかもロックにおいては、快樂や苦痛はどこまでも觀念の様態としてつかまれ、主観的・意識的なことがらとして考えられている。だが、それにもかかわらず物に接して人間は欲求し行為へと志向するのであり、ここにイギリスの経験哲学が実践哲学と結びつく可能性が出てくるのである。

では、どのようにして人間は欲望を介して行為へと向かうのであるか。ホッブズのばあい、先の運動の概念から説明される。「対象の行為が耳目その他の機関から心へ継続されるばあい、そこに生ずるじつさいの効果は、運動すなわち努力にほかならず、それは動いている対象への欲求 appetite または嫌惡 aversion である」²⁾「物体の運動が人間の運動へ、それも物体への感情となる。そして、欲求が充たされるとき、そこに歡喜 pleasure が生まれ、それが否定されるとき、そこに不快 displeasure が生まれる。しかも、「なんにせよ、ある人の欲求・意欲の対象となるものは、すなわちかれがかれ自身としては善 good と呼ぶものであり、かれの憎惡・嫌惡の対象は惡 evil である」³⁾ロックもまたエピクロス以来の快樂説に立ち、人間には快樂と苦痛の觀念がかならずあらわれることを承認する。「喜悅 delight および不安 uneasiness はいずれも、感覺および反省の両者によるほとんどすべてのわれわれの觀念と結びついている。そして外部からのわれわれの感觸 affection of our senses from without も内部における心の思考 thought of our mind within もすべて、われわれのうちに快樂 pleasure または苦痛 pain を生まないものは、ほとんどない」⁴⁾そして、この感情が働くために、人間は力を用い、行為へと向かうのである。「苦痛はわれわれをして仕事をおこなわせるために、快樂がものと同じ効力と実益とをもっている。なぜなら、われわれは快樂を追求するためにするのと同じく、苦痛をさけるためにはいつでもわれわれの能力を用いよ

うとしているからである。」⁵⁾しかも、人間が快樂を求め苦痛を避けるべく行動することは、人間の本性であり、それ自体善である。これを人間の原罪とみなすことは、人間性への不信であろう。現実の経験的な人間性を当為から審判するのではなく、そのまま肯定することから、啓蒙思想は出発するのである。ロックの思想の形成過程からみても、初期の『自然法思想』のなかには、この点はみられなかった要素である。⁶⁾もとより、ロックが快樂説をとるにしても、その内容はきわめて多義的であつて、これを感覺的快樂論として一義的に決めることはできない。その系譜についてみても、ロックが物質的快樂よりも精神的快樂を主張し、五つの永続的な快樂つまり健康、名声、知識、善行、至福を重視するために、エアロンはロックの倫理觀をホッブズの唯物論的快樂主義ではなく、ガッサンデイのキリスト教的快樂主義に基づくものと考えている。⁷⁾事実、ロックにとつては感覺的快樂はきわめて、相対的であり限界のあるものだともうけていたのである。

ところで、ロックが物質的快樂と精神的快樂とのいずれを重視したかという問題は、さしあたりどうでもよいこととがらである。われわれが問題とするのはむしろ、ロックが人間の意志を決定するものは快樂＝善であり、しかも善の不在の状態である不安であると考え、ことに目前の緊迫せる不安が最も大きい欲求である、と考えていることである。⁸⁾理想主義哲学にみられるように、最大の積極的な善が人間の意志を決定することはできないとして、ロックはつぎのようにいう。「私は善、より大なる善が、たとえ意志を決定するものであると理解され承認されても、それに相應して生ずるわれわれの欲望が、それを欠いているためにわれわれを不安にするまでは、意志を決定しない、と断定せざるをえない。また、たとえいかにある人をして豊富が貧困に優ることを確信せしめ、かれをして生活の立派な便宜がきたならしい貧乏よりもよいということを知らしめ認めさせても、しかしかれが貧乏に満足し、

そのなかでなんらかの不安を見いださないかぎりには、かれは動かない。かれの意志はけつして、そこから抜けでようとして行動するように決定されないのである」⁹⁾このようにみると、ロックは絶対的な善を仮定してそこから現実の人間を測定するのではなくて、どこまでも個人の経験的な心理に行動の原理をみている点で、きわめて現実的・相対的な見方に立っている。のみならず、「私はより善きものを見、それを可となす、されど悪しきものに従う」¹⁰⁾というある不平家の言葉を承認するとき、われわれはロックの思想のうちに、マンデヴィルまがいのリアルな人間像をよみとることができるであろう。さらに、この行為の善悪を判断する基準は、それが生みだす快楽の量であり結果であるというとき、¹¹⁾ロックのうちにわれわれは、十八世紀のイギリス功利主義思想の萌芽をすらみとめることができるのである。

しかしながら、ロックに特徴的なことは、ロックは感覚論や快楽説のみからその思想を一義的に演繹しているのではなくて、反省のカテゴリーが思想の他の反面を貫いているということである。この点では、たしかにロックはホッブズのような感覚的经验論としての徹底性を欠いているかもしれないが、それとともにホッブズを超えてそれとはちがった思想的個性をもつことになるのである。すなわち、人間の悟性に反省の働きをみとめるばあい、物に対する人間の欲求とならんで、人間が自己そのものへ反省する過程で、見る自己と見られる自己との対話が可能となる。自己を他者として見ることは、自覚の深まりであらう。ここに、近代的人間の自己分裂が生じ、内省をばねとして感覚的知識から脱却し、人間知にふさわしい複雑な諸観念を構成することができるのであり、また、道徳哲学のうえでは個人の欲求とその制止、そしてより大なる善の選択の可能性が個人の人格に内在することになるのである。ホッブズの自然状態における人間像が自己の生活手段を追求する過程をめぐっての万人の万人に対する闘争

状態におちいったのに対し、ロックの人間像が自然状態においてすでに理性的存在としてあらわれ、一方において自己の自然権を欲求する主体であるとともに他方で自己規制の主体でありえたのも、実はこうした『人間悟性論』における反省のカテゴリーに照応してのことであろう。¹²⁾逆にいえば、ロックの『統治論』における自由にして平等な諸個人が労働によって共存する自然的境地は、『人間悟性論』における反省する人間像を映しだしていたといえるのである。しかも、ロックにとって内省こそ人間の本性であり、自己へ反省することによって人間ははじめて能動的力をもつことができる。そうだとすれば、ロックの人間像の核心は、自らを感覚的存在から自由な理性的人間存在へと高めることであつたのである。

このようにみると、『人間悟性論』はけっして経験的にみられる感覚的人間をそのままの形で固定しているのではなく、それを前提とはしながら、心の働きをとおして自覚する人間に自己形成する人間像をえがいているのである。では、どのようにか。人間が物体と交渉するとき、物体の作用を人間は感官をとおして受動するのであり、この意味で感覚的存在としての人間はいわば受動的であつた。ところで、感官をとおしてみられるかぎり、物体は能動的な力をもたないのである。物体は感官に作用をあたえるのだが、同時に物体は感官をとおしてみられている。「物体はわれわれの感官によつては、われわれが心の作用を反省することによつてうるものほど、明晰・判明な能動的な力の観念をわれわれにあたえない。」¹³⁾物体と物体、または物体と感官との関係つまり自然的世界には能動的な力は存在しないのであつて、人間が心自身の作用を反省するときにはじめてえられるものである。能動的な力は人間固有の精神の力である。ロックは物体に始動因がみとめられないとして、つぎのようにならべている。「われわれは物体から運動の始め *beginning of motion* に関するなんらの観念をもうけとらない。静止しているある物体は、

われわれに動こうとするならかの能動的力のいかなる観念をもあたえない。そしてその物体が運動するばあい、その運動はその物体において能動 *action* よりも受動 *passion* である。……運動の初めの観念をわれわれは、われわれ自身のうちに通過するものを反省することからのみ得る。このばあいわれわれは、これを意志し心の思考によつてはじめて、以前に静止していたわれわれの身体の部分を動かすことができるということを、経験的に知るのである。そんなわけで、われわれは物体の作用を感官で観察することによつては、能動的力のきわめて不完全な漠然とした観念しかえられないとおもわれる。……心は能動的力に関する観念を、なんらかの外的感覚 *external sensation* によるよりも、心そのものの作用を反省する *reflection on the mind's own operation* ことによつてよりはつきりと受けとるのである。¹⁴⁾

人間は感覚的存在として物理的身体的な法則に従属するとともに、他方で心自身を内省する精神的主体として、この感覚を越えて能動的な力をもつものであり、ロックはむしろこの後者に人間の固有の本性をみとめていた。人間はこの力をもつために、自然的必然性の世界からまぬがれる、とともにそれをかえつて規制することができるのである。ロックはこの力を意志とよんで、つぎのようにいう。「われわれは、ただこれこれのある特別な働きをなし、あるいはなさないように定め、またいわば命令するところの心の思考あるいは選択によつて、いくつかのわれわれの心の働きおよび体の運動を始めたり、抑えたり、続けたり、止めたりする力をわれわれ自身のうちに見いだす、¹⁵⁾ ということは少くともあきらかであるとおもう。この力は、われわれが意志 *will* と呼ぶところのものである。¹⁶⁾ いうまでもなく、人間であるかぎり、こうした選択し推理し思惟する能力は、欲求し行動するすべての個人のうちに内在している。「意志と欲求とは異なる」¹⁶⁾ 個人が単なる目前の欲求にかられて行為することは経験的にみとめられ

るが、こうした行為は意志を媒介していかないかぎり、非自発的である。人間的行為はこうした心の働きによって導かれるものでなくてはならない。「心がこのように定め、または命ずる結果として生ずるその働きの抑制 *forbearance* は、自発的 *voluntary* といわれる。そしていかなる働きでも、こうした心の思考なしにおこなわれるものは、非自発的 *involuntary* といわれる。¹⁷⁾」

人間の心には、このように感官によってえられる観念を比較し判別するとともに、いろいろの欲求を行為に導いたり抑制する力があり、この力を能動的な力であった。「あらゆる人は、思うに、かれ自身のいろいろな行動を始めたり、抑えたり、続けたり、終わらせたりする力を自らのうちにみいだす。」¹⁸⁾ところで、問題となるのは、現実の人間がこうした意識の働きを媒介として行為するかいなかであって、ここにロックは自由の観念をみるのである。「自由 *liberty* の観念は、心の決定または思考にしたがって、ある特別の行動をなし、または抑えんとする、ある行為者のうちにある力の観念である。」¹⁹⁾物体の作用によって人間の感官が限定されている自然的世界には、自由はなく、自己の意志によって決定する力が働く人間の世界においてのみ、自由は存在する。というよりは、人間は精神を働かせて行為することによって、自然的必然性をまぬがれて、自由となるのである。とともに、自由とは積極的に「われわれが選びまたは意志するところにしたがって、行動しまたは行動しないことができることである。」²⁰⁾ここに『統治論』にも貫徹する個人の積極的自由の観念がみられよう。

ところで、この自由はすでにあきらかなように、ロックにとって感覚的衝動のままに目前の利害にしたがって行動する自由を意味するものではない。もとより、「われわれのうちにはつねに誘惑し、意志を決定しようとするきわめて多くの不安があるのだから、もっとも大きく緊急なものが次の行動への意志を決定することは、自然である。

そしてまた大ていはそうである。」²¹⁾しかしながら、他方で人間はこれらの諸欲望を比較し検討する能動的な心の働きをもっていることも、また経験的にあきらかである。そしてここにこそ、欲求を停止して判断する人間固有の本性があり、まさに人間の自由がある。「心は大ていのばあい、経験的にあきらかなように、いろいろの欲望のあるものを遂行し満足させることを停止する力をもっており、このようにすべての欲望についてもあいついでこのことがなされるのであるから、心は自由にこれらの欲望の対象を考察し、これらをすべての方面において吟味し、また他の欲望との軽重を比較できるのである。ここに人間の自由がある。」²²⁾だが、この心の働きて欲求満足を停止し、思惟で欲求を支配することは、単に人間の本性の現実性ではない。むしろ、それは可能性であり、戦いとるべき義務である。「ある行動が停止される間に、われわれがなさうとしつつあることの善悪を吟味し、考察し、判断する機会をもつ、そしてしかるべき吟味によってわれわれが判断したとき、われわれは義務を果たしたのであり、幸福の追求にさいしてなしうる、またなすべきすべてのことをなしたのである。」²³⁾したがって、この過程は人間の本性の形成であり完成なのである。「公正な吟味の最後の結果にしたがって、欲求し意志し行為することこそ、われわれの本性の完成 a perfection of our nature である。」²⁴⁾

- (1) Bonar, J.: *Philosophy and Political Economy, in some of their historical Relations*, pp. 91.
- (2) Hobbes, T.: *Leviathan*, p. 33. 邦訳一〇〇ページ。
- (3) Hobbes, T.: *ibid*, p. 32. 邦訳九八ページ。
- (4) Locke, J.: *An Essay concerning Human Understanding*, Vol. 1, p. 160. 邦訳上二二二ページ。ロックは、快楽と苦痛の観念を、「感覚および反省の両者による単純観念 simple idea」と呼ぶ。これらが反省から生ずるものでもあることが、ロックの特質である。これら二つではのちのへる。
- (5) Locke, J.: *ibid*, Vol. 1, p. 161. 邦訳上二二二ページ。

(6) この点については、小論「若きロックの自然法思想」(八五卷二号一九ページ参照)。

(7) Aaron, R. I.: *John Locke*, p. 257-8. エフロンはロックの道徳哲学の承継についても、その経験論のばあいと同じく、ホッブズからの影響をしりぞけて、ガッサンデイの快樂説の影響をあげている。「ロックの快樂説がホッブズからのものであるかどうかは、疑わしい。……それはガッサンデイの快樂説と多くの共通性をもっている。」これに対しても、わたしは以前の説明をもって答えるであろう。

(8) 太田可夫『力について』如水書房、一五〇ページ以下。本書は副題にもしめされているように、「ジョン・ロックの人間悟性論第二卷第二十一章の一つの研究」であるが、きわめて精密なユニークなこのロック哲学分析のなかで、教授は意志限定としての不安をロックが重視していることの意義を、ライブニッツに対比させて、詳しく検討している。この章は、たしかに、ロック哲学の要点である。教授が近代自然法思想から『人間悟性論』をとらえる見解には、わたしは同意したい。

(9) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 335. 邦訳上二四一ページ。

(10) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 336. 邦訳上二四三ページ。原語は、*Video meliora, proboque, deteriora sequor.*

(11) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 341. 邦訳上二四五―六ページ。ロックの善悪の基準は、きわめて相対的であり、質的なものではなくて量的である。「すべての善は一般に欲望の本来の目的ではあるが、しかもすべての善は、たとえ知覚され、善であると認められても、かならずしもあらゆる個々の人の欲望を動かすのではなく、ただそのなかでその人の幸福に必要な部分をするものとみなされる部分、またはそれだけの量のみがこのことをなすのである。」

(12) 「ジョン・ロックの市民社会像」京都大学経済学部創立四十周年記念論集、三八二ページ以下。

(13) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 311. 邦訳上二三一ページ。

(14) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 312-3. 邦訳上二三一―三二ページ。

(15) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 313. 邦訳上二二三ページ。

(16) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 332. 邦訳上二四〇ページ。

(17) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 314. 邦訳上二二三ページ。自発性の観念はロックにとってきわめて重大であることは、太田教授の『力について』(四一ページ)にみられる。「action と passion とに力を分ける考え方は、すでに外的自然に対立した

なにか人間的なもの、いいかえれば客観的なものに対立した主観的なものを、予想している。すなわち、自覚性の観念がその底にひそんでいるとみなければならぬ。」

- (18) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 315. 邦訳上二三四ページ。
- (19) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 316. 邦訳上二三五ページ。
- (20) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 329. 邦訳上二三八ページ。
- (21) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 344. 邦訳上二四六ページ。
- (22) (23) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 345. 邦訳上二四六ページ。ロックは人間の自由と理性との関係をつぎのようについて。「もしも理性の指導から脱出し、そしてわれわれが悪を選び行わせぬようにとの、吟味や判断などの拘束を欠くことが、自由であり、真の自由であるなら、狂人と愚者のみが自由人である。」(p. 345. 邦訳上二四八ページ)。しかも、この理性的判断のための欲求の停止こそ、人間固有の特権である。「知的存在者が真の幸福に向かってたえず努力し、これを着実に追求するばあいには、かれらの自由がなを中軸として動くのかといえは、つぎのことである。すなわち、個々のばあい、かれらが自分の前方をみて、そのとき提出され、または欲求されたその特殊なものが、かれらの主要な目的への道程にあるかどうか、また、かれらの最大の善であるところのものの真の一部分をなすかどうかを知るまでは、かれらはこの追求を停止することができるといふことである。このことは、有限な知的存在者の偉大な特権 the great privilege of finite intellectual beings である。」(p. 348-9. 邦訳上二四八ページ)。
- (24) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 345. 邦訳上二四七ページ。

六 啓蒙的人間像への道

われわれはこれまで、ロックがデカルトの影響をうけながらも、デカルトの生得観念を批判し、その合理論に対して経験論を確立した意味をあきらかにした。このばあい、ロックの経験論は、現実人間が感覚をとおしてのみ

物と交渉することによつてはじめて觀念をうるとするかぎり、感覺的經驗をその基礎としており、したがつてまた、ホッブズ以来のイギリス感覺論の系流をふむものといえよう。そして、人間は一面ではここに物から作用をうけていろいろの感情をもち、この感情が欲求となつて行為へと向かうのであった。だが、同時に他面でロックの人間像には、感覺的欲求を超えて理性的に思惟し、これらの欲求を比較し判断する能動的人間がやどつてゐる。むしろ、この後者がロックにとつて人間の類的本性であり、ホッブズと異なる要素であらう。そして二つの側面が合わさつて一つの人格を形成しているものであり、しかも、感覺的人間から理性的人間への転化が、人間性の完成である。人間の本性に反省の働きがあるから、人間は自己内部の諸觀念や諸欲望を比較し検討することができるのであつて、人間の自由もそこにあるのである。そこには、衝動的な行動は退き、もつぱら理性に信頼をよせて、より大なる善への志向が生まれるにちがいない。ロックが『統治論』の自然状態で個人の自己規制や人類の共存状態を描いてゐるのもこのためであり、この人間性を労働観によつて支えていたのである。

もとより、ロックが理性によつて感覺を支配するところに人間の自由をみとめてゐるとはいへ、ドイツ觀念論のように感覺的なものが否定されるのではない。ロックの經驗論ではどこまでも、この身体的個人がこの自然のなかで欲求する人間を基礎とし、自然から離れていない。むしろわれわれの欲求が、理性によつて高められるのである。「提示されたある善を正しく考察し吟味することによつて、われわれの欲望を高めてその善の価値にふさわしいものとすることは、われわれのうちにある。」¹⁾このようにみると、イギリスの經驗論的個人がロックの理性を媒介して、近代的個人として自律化しているといへはしないだらうか。しかも、ロックにおいては自然と人間とが分裂してゐるのではなく連続しており、両者が相互滲透して一つの人格を形成してゐるのであつて、そこに自然が人間

に生成する過程がよみとれよう。そしてこの点が、啓蒙的人間像の出立点を画しているのである。しかも、人間理性の判別する善は、神の選ぶ善でもあった。「神自身も善でないものを選ぶことはできない。全能者の自由といえども、かれが最善のものによって決定されることを妨げるものではない。」²⁾とすれば、人間の知性の開示した善のうち、神の叡智をみとめているのであり、理性と啓示との一致というのも、実はこの意味においてである。これはたしかに啓蒙的自然宗教の生誕を告げるものであらう。

ところでこうしたロックの人間像は、思想的に内乱時代から名譽革命への歴史的推移に対応したものであった。すなわち、ロックの人間像は衝動的欲求を保持しながら、たえずこれを理性によって純化することにあつたのであり、名譽革命におけるブルジョワ的人間像をうつしだしている。³⁾だが、ロックの人間像がそのまま十八世紀の啓蒙思想へ流れるというわけではない。また、ロックの思想自体についても、『人間悟性論』の人間像が『統治論』のそれに直接つながっているのではない。そこには、労働による社会的人格の確立はみられない。だが、それは十七世紀から十八世紀への転換という歴史的個性をもつものであつた。たしかに、一面で人間の本性をそのまま実現すれば、一つの自然秩序が生まれる可能性はみられはした。この点では、ホブズの暗さはロックにはみとめられない。人間的自然へ信頼をよせ、この可能性の実現を個人の知性に求めたのが、まさに『人間悟性論』であつた。だが、この可能性は十八世紀の啓蒙思想家シャフツベリのように、そのままの形で現実性となつていてのではない。⁴⁾ましてや、スミスの人間像と直接的に結びつくものではない。すなわち、『統治論』においても他人の自由や生命をおかさぬことが一つの義務とされ、この自然法を侵犯するものに対しては、刑罰が課せられていたし、『人間悟性論』においても、国家や立法者によって個人は規制を加えられるものとされる。「道徳的に善であり悪

であるということは、われわれの意識的行為がある法則に一致し、または一致しないことにほかならない。この法則によって立法者の意志と力によって、善または悪がわれわれにもたらされる。この善と悪、快樂または苦痛は、立法者の命令によって、われわが法則を守りまたは破ることにともなうものであつて、報酬と処罰と呼ばれるものである。⁵⁾十八世紀のイギリス啓蒙思想の課題は、こうした立法者の規制なしに、ロックの人間的本性の可能性を現実性に転化することではなかったか。

- (1) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 344.
- (2) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 347. 邦訳上二四八ページ。
- (3) 浜林正夫氏は、ロックの『宗教的寛容論』について、「一六六〇年代はじめに、カソリックとセクトとの中道を求めようとしたロックは、ここであきらかに、セクトをふくむプロテスタントの反カソリック統「戦線への結集を主張しはじめている」とのべている（水田洋編『イギリス革命』第八章「王政復古から名誉革命へ」三一八ページ）が、この立場は、『人間性論』についても、あてはまるであらう。
- (4) 「シャフツベリの道徳哲学」経済論叢八七卷一・二号参照。
- (5) Locke, J.: *ibid.*, Vol. 1, p. 474. 邦訳上三三〇ページ。人間的本性の可能性を現実性に転化することに、啓蒙思想の一つの歴史的課題があるのであって、このことは思想の発展をしめすとともに、他面で現実への妥協性をしめすことになるのである。

(完)